HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パターリング国家ードメスティック・バイオレンスの政治経済学
Author(s)	マデラン, エーデルマン
Citation	教育福祉研究, 10(1), 23-37
Issue Date	2004-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28369
Type	departmental bulletin paper
File Information	10(1)_P23-37.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[Journal of Education and Social Work No.10-(1) 2004
教育福祉研究　第10-(1)号　2004]

バターリング国家—ドメスティック・バイオレンスの政治経済学

マデライン・エーデルマン

親密な関係の中での暴力……は、加害者や被害者の遺伝子構造の生成物として理解するのではなく、あるいは彼らの心理的な特性によるものと理解するのでもなく、社会的状況の生成物として理解するべきである。(Websdale, 1998: xxviii)

現在の貧困理解は20世紀末の資本主義における政治経済や文化を問うことで得られたものではない。特に近年では、それは福祉に依存する貧困層の特性と行動についての見聞なのである。(O'Conner, 2001: 4 in Morgen, 2002: 4)

ずっと昔、〔人類学は〕(血縁と婚姻によって定義される)家族と(同居を基礎とした)世帯とを区別した……その後、われわれは家庭の編成の仕方が文化によって様々であるということを実証するための、一連の民族誌学的な実例を蓄積した。そのことは、これらの洞察を否定するような家族の価値の低下に関係していた…… (Creed, 2000: 329)

はじめに

私のところでドメスティック・バイオレンス(DV)について学び始めた学生たちは、決まってバタードウーマン(暴力をふるわれている女性)を運が悪い、受動的だ、責任感がない、悪い母親だ、教育を受けていない、貧困だ、というように描く。これらのイメージはどこから来たのだろうか。そうたずねられると、「知っているからだ」と主張する学生もいる。自分の経験や見たことを明かす学生も少数ながらいる。しかし、学生たちのDVに関する知識の情報源は、現実を脚色した、あるいはフィクションをもっともらしくしたテレビの犯罪番組や法律番組であるようだ。そこで、DVの被害者やサバイバーに関するこれら一般的なイメージに対抗する手助けをすることを本稿の目的とする。さらに私自身の教育者としての成長を超えて、さまざまな学問分野におけるDV研究者が、この政治経済学的視点を彼らの今後の研究に取り込むこと、あるいはその逆をすることを促したいと思っている。ここでは、「ドメスティック・バイオレンスの政治経済学」を構成するDV研究の枠組みを概説していく。ドメスティック・バイオレンスの政治経済学は、DVと(1)政治体制、(2)経済編成、(3)国家政策を通じて規範的に明示された支配的な家族イデオロギーとの重なりを明らかにするために、DVを文化的・歴史的なコンテクストの中に位置づける。これらの要素を組み合わせることにより、アメリカ社会におけるしばしば目に見えない一連の状況—すなわち、「家族の価値」によって形づくられた構造的な不平等と国家経済関係のロジック—とDVとの相互連関が見えてくる。したがって、ここではバターリング国家の概要を描くつもりである(1)。

本稿では特に、貧困と交差するものとしての暴力(battering)の政治経済学を強調することに関心がある。はじめにDV研究について、多元的で学際的な領域への貢献と限界に的を絞って簡単にレビューする。次に、私のいう政治経済学とは何かを説明する。第三に、DV研究で政治経済学的視点をもつのに有効な出発点として福祉改革を詳述することで、アメリカでのDVと貧困との重なりということを政治経済学の枠組みに付加する。第四に、ドメスティック・バイオレンスの政治経済学の研究が意味するものについて述べ、今後の研究の方向性を示す。貧困化と暴力に関わ

る合作的な主導の記述で締めくくる。そしてこの政治経済学は、DVについてのもっと一般的な議論にシフトするだろうと主張する。

1　ドメスティック・バイオレンス研究

1970年代半ばに入って、アメリカのフェミニストは妻への暴力を再発見した。すぐに女性たちは、家族内外での男性たちによる支配や暴力、虐待などに対抗して団結した一彼女たちは家父長制的社会コントロールと不平等とが連結したシステムの中の暴力的な部分は、家族の中だけではなく文化や政策や法律、経済にも現れていると考えた(Dobash and Dobash, 1979; Stanko, 1985)。バタードウーマン運動は、社会の全セクターでそのような暴力の原因と影響に取り組むための正義を要求した。暴力的な男性からの国家ベースの保護もそこに含まれていた。それに続く犯罪モデルは取り締まりと逮捕、起訴、刑罰に焦点を当て、暴力をふるう男性を犯罪者として扱うよう求めた。今日アメリカでは、DVは犯罪であると受けとめられている。司法制度と法システムが犯罪というかたちをとったDVにある程度対応している。

家族生活に国家が侵入することを正当化し、規制に対する政府のコミットメントを維持するために、DVについての文化的に重要で説得力ある証拠が必要であった一そのほとんどは社会学者、犯罪学者および心理学者によって生み出された。概してDV研究はこの現象に対する意味のある洞察をしてきたが、限界もあった。第一に、DVについてのわれわれの知識は、ほとんどが犯罪であるとされた事から形成されている。第二に、アメリカ社会に浸透している個人主義の強調が、研究に反映し、研究を屈折させている。第三に、DVが逸脱なのか本性なのかというよく知られた相対立する説が存在する。私はこれについて不十分ながら論じるつもりである。以下からは、これらの限界が、そのいくつかは気づかないうちにDV研究にひろがっていることをスケッチする。

DV研究は女性に対する暴力(violence against women: VAW)と家庭内暴力(family violence: FV)という見方に分かれている(Dobash and Dobash, 1992)。VAWは女性への暴力を、セクシャル・ハラスメントやレイプなども含む、ジェンダーを反映した一連の暴力に位置づけている。一方、FVは子どもや高齢者への虐待やネグレクトに結び付いたものである。両学派の研究は、DVのタイプや頻度、発生率、広まり、持続性についての重要な資料を提供している。たとえば保護に関する裁判所命令やバタラー(暴力をふるう男性)への介入プログラム、警察が対応する「DVコール」、抑止政策などが現在利用できるようになっていることは、刑事制度と法制度の主導性を評価する際に重要である。しかし犯罪と法律にもとづく研究を過度に強調することで、さまざまな面でDVに関する知識の形成に限界が出てくる。第一に、DVの定義はしばしばアプリオリに固定されている。第二に、その定義は普遍的に当てはまるものと想定されている。第三に、相対的に狭い、国家ベースのDVの定義は、時に調査に制限をもたらす。第四に、多くの研究者は問題の多い葛藤配列スケール(Conflict Tactics Scale: CTS)を用いた操作を行っている。CTSでは、家族の暴力は対人間葛藤を支配する装置だと仮定している。CTSのデータは暴力を相互的で対称的なものであるとし、(脅しから自己防衛など多岐にわたる)前後関係や意味、(影響がないものから重大な損傷にいたるものまでの)結果を考慮していない。

第五に、DVの調査は、本人であれ公式のデータソースであれ、しばしば判決を下された犯罪者とそのパートナーや保護された被害者に焦点を当てる。おそらくこれは、地域と研究者の連携、アクセスのしやすさ、捕捉集団のサンプリングのしやすさといったことによるものである。しかしこのやり方をとることで、その意図とは無関係に、貧困な家族や有色人種が過度に抽出される可能性がある。というのも、これらの人々は司法制度の偏りと地域の資源の少なさとによって、犯罪者とされる率が高いからである。調査から排除されやすいのは、国家ベースの法的な介入を拒否された

人やそこにアクセスできない人、たとえば不法移民や上流の白人女性、同性愛の被害者や加害者である。最後に、犯罪モデルは暴力をよくある行為ではなく逸脱した行為—犯罪者がやることであって、まともな市民であればやらない行為—だとする。これらの要素が一緒になることで、DV は暴力や犯罪と結びついた一定のグループの逸脱であり、その個人が暴力の気質を持っていたのだという考えが強化される結果となった。

DV に関する心理学的な研究は、加害者や被害者個人に対するこのような強調を存続させている。心理学的な研究の調査対象者は、委託による、あるいは臨床や教室ベースのサンプルから得られることが多い。初期にはレノア・ウォーカーが DV は個人の病理であるという文化的な仮説に対抗しようとし、それは「深刻な社会的障害である」と主張した（1979:43)。しかし「学習性無力感」、「暴力のサイクル」、「バタードウーマン症候群」といった概念は犠牲者の理想的なプロフィール形成に使われ、彼女の研究は「逃げられない」バタードウーマン個々人の病理学として用いられることが多い。この分野におけるフェミニストの研究では女性が助けを求める戦略と制度化された学習性無力感とを強調するが、ウォーカーの概念はすでに一般的な文化や援助制度にも広まっている。バタラーの類型学における心理学的な研究では文化的な非難の矛先は女性から逸れ、男らしさの構造を示すことが中心になっている。また、人格障害や精神障害と診断された個々のバタラーを医療対象とし、やはり加害者を地域の標準から逸脱した異常者であると概念化している。近年、進化したかたちで心理学が復興しており、このことによって DV を気質の問題と片付ける心理学万能者への依存が拡大し、DV は客観的に観測できる生まれつきのものであると考えられるようになった。また、遺伝子上の問題である男性の病的な嫉妬心と、性的なパートナーをコントロールしたいという欲望とを結びつけた暴力についての文化的な神話が信憑性を持つことにもなった。

要するに、現存の研究は重要で説得力のある証拠を提供したが、それは刑事制度の範囲に限られており、そして暴力をふるう可能性を持った個人や集団をベースにした説明なのである。この学際的なアプローチは DV 研究への入り口を数多く提供している。しかしわれわれが知っているのは犯罪化による枠組みであり、個人主義的な方法論であり、逸脱と本性との相対立する議論である。研究におけるこの流れは、文化や政策や経済に対する批判全体にアーチをかけるような分析から離れ、むしろ個別のあるいは文脈から切り離されたデータに焦点を当てている。もしくは、地域的な事情に関する経験的な状況を、スナップショット的にあるいは横断的に見ている。それぞれのアプローチには独自のメリットがあるが、抽象化されたデータや地域的な状況、あるいはこれらの状況が長い間にどのように構成されたのかということについて、DV の構成概念は分析が十分ではなく、論理的必然性をともなわないもののままである。これらの分析はもっと文化的・歴史的に扱うことが必要であるだろうが、優れた例も出始めている（たとえば Abraham, 2000; Merry, 2000; Lancaster, 1992; McClusky, 2001; Mcgillivray and Comaskey,1999; Websdale, 1998)。このような研究を行うことなしには、あたかも DV が普遍的に—あるいは地域的に—経験され、刑事制度で扱われ、研究者が定期的に評価する単なる社会の一つの要素「である」かのように思われる。このように確立された成果を補完するために、また、DV に関する幅広い批評とフェミニストの経験的な分析をさらに進めるためにも、暴力を政治経済学と家族イデオロギーの領域に置くことにする。

2 政治経済学

「政治経済学」という言葉を知的に探求しようと思えば経済思想史全体を跡付けることになりかねないが、簡単に言えば、政治経済学とは国家と経済との関係についての学問だと定義することができる。たとえば、資本主義における福祉国家は「通常、……個人の間であるいは階級の間でライ

フチャンスを再割り当てするために、経済的な再生産と分配を行うプロセスに国家が介入する社会であると定義される」(Pierson, 1998: 7)。政治経済学においては基本的に、経済への国家の介入を最小限にとどめることを主張する者と、国家が国民の福祉に介入することを擁護する者との間で対立がある。

19世紀の古典的な政治経済学は、産業化や都市化といった変化と関係した産業資本主義の出現、財の蓄積、政府の中央集権化、職場と家庭の分離を通じて形成された目に見える不平等によって特徴付けられる。一方で研究者が関心をもっていたのは、国民国家と経済という、明確な実在として理解されていた二者の最も良い関係についてであった。アダム・スミスは、彼の現代の支持者と同様に、需要と供給に関する自然法に導かれた自由な市場を擁護している。スミスによれば、これによって利己的な個人が自己の福祉を最大化することが可能になり、その結果、意図せずして社会の福祉が最大化する。対照的にマルクスは、国家は経済を表すものではなく、統治機関とそれによるルールは支配階級の意思と関心を表したものであるという政治経済学を使った鋭い批判をした。とりわけケインズ的資本主義に関わる理論形成は数十年かけて近代化・発展し、植民地主義にもつながったのだが (Carrier and Miller, 1998;Pierson,1998)、今度は「新政治経済学」の分野に話を移そう。

新政治経済学は今でも市場の制御を扱ってもいるが、その名称が示しているように、ポスト・フォーディズムという新しい時代における過去四半世紀に急速に出現した社会的、政治的、経済的な状況を扱っている。ポスト・フォーディズムはフォーディズムと対比される。フォーディズムは戦後の大量生産の発達と、それによって到達された生産の組み立てラインにおける組織化された労働力や、大量消費、家族賃金モデル、ミドルクラスの郊外居住者、国家によるセーフティネットの提供などを特徴とする現象である。一方、ポスト・フォーディズムはそれと異なる状況によって特徴付けられる。つまり規制緩和、民営化、フレキシブルな蓄積、臨時雇用化、非熟練のサービス労働要員などの発達である (Harvey, 1989, また Goode and Masovsky, 2001; Munger, 2002 も参照)。ポスト・フォーディズムはグローバルな政治文化的経済を作り出す。これがすなわちグローバリズムである (Harrison, 1995)。

21世紀の新自由主義的な資本主義的グローバリゼーションは、古典的な配分を超え、国家経済関係の新しいロジックを形成している。資本が急速に移動するこの時代にあっては、法人が経済、さらには政府の政治権力にさえも勝るかたちで存在している。もっとも、政府はどんどん市場的になり、さらに／あるいはグローバルな資本の利益を指向するようになっていると言われているが。このことはある程度、政府の権限の縮小とその結果としての公的空間の民営化によって果たされている (Jurik, 2003)。同時に、アメリカは「新自由主義的な資本主義的ロジックを、世界銀行と国際通貨基金の貸し出しを通して輸出している」(Kingsolver, 2002: 24)。政治経済学においては、グローバリゼーションを積極的な発展として解釈する者もいる。一方で、このような発展を憂慮する者にとっては、国家の枠組みを超えた多国籍の市場が優勢になることや統制的なネットワークがもたらすものは、国民国家の権限の弱体化ではないまでも、福祉に対する国のコミットメントの弱体化である (Okongwu and Mencher, 2000; Pierson, 1998)。批判的な立場の者たちは福祉国家の縮小を嘆き、何とか生きている人々と意のままに蓄積をしている人々との格差が広がっていることを嘆いている。

ポスト・フォーディズムとグローバリゼーションの時代に生み出されたこのような可能性と不平等に関する政治経済学的な見通しは、ほとんどの研究分野に何らかの形で組み込まれている。研究者たちは支配と搾取に焦点を当てただけのグローバリゼーションの経済学的分析を過度に批評してきた。しかし、たとえば人類学者たちは人々がグローバリゼーションの価値や影響を身近なところで予期したり、拒否したり、変形したりするやり

方を検討している。William Roseberry (1990: 49) は、人類学的な政治経済学は本質的に歴史的であると主張し、「ローカルなそしてグローバルな歴史の結合」において生み出された「経験とその受けとめ方とが、不平等と支配によっていかに形づくられるか」に焦点を当てている。言い換えれば Roseberry のような人たちは、グローバルな資本主義の絶え間なく変わるプロセスを生み出し維持するのに必要な、ローカルなレベルでの複雑で連鎖したイデオロギーと制度について一層ゆたかに評価をしていく必要があると主張しているのである。

これらの変化に注意することで、ものごとのあり方とあるべき方向に関する過度に偏った主張を分析し、示すことができる。変化に注目することで、さまざまな形態の失敗や対抗を垣間見ることもできるだろう。さらに、歴史的な不連接を分析することで、政治形態と経済と家族イデオロギーの間の連結した関係の本質を洞察することが可能になるだろう。たとえばグローバルな変化についてのローカルな視点は、グローバルな市場に組み込まれたジェンダー化・人種化・階級化された不平等という枠組みを明らかにしている—すなわち、サービス業で雇用されている黒人女性、あるいは一生懸命に働いていないといって福祉改革者が非難する「女性世帯の世帯主」として無賃金の家事労働についている黒人女性の貧困化を背景に、文字通り、意のままの蓄積が行われているのである (Folbre, 1994; Morgen, 2002)。しかし開発とグローバリゼーションの研究者は、女性のグローバルな経済へのアクセスは家庭におけるジェンダー関係の構造に良い変化をもたらし、女性は「男性が失っている、より大きな個人的な自律と自立を得ている」(Sassen, 1998: 91) と主張している。このような主張は DV の視点を強く要請している。国連のプログラムである Gender and Poverty Reduction のようなイニシアティブを考えるとき、世界の DV 研究者が、経験に基づいた政治経済学研究に従事することが重要である。

グローバリゼーションの時代における、ドメスティック・バイオレンスの政治経済学の発展は、したがって、「資本主義的制御のメカニズム」(Blim, 2000: 33) を問いただす新しい方法を必要とする。現在の国家／経済のロジックは、フレキシブルな資本主義的蓄積を支える状況を作り出すのにどれだけ「家族」についての規範的な考えに依存しただろうか。福祉国家の地図が一昔前の家族関係に縮小したときに、雇用のパターンはどのようにシフトするだろうか。DV の資本主義的制御とはどのようなものだろうか。

3 アメリカにおける貧困化とドメスティック・バイオレンスの政治経済学に向けて

ドメスティック・バイオレンスの政治経済学は、DV と政治体制やその政策、経済編成、国家政策を通じて規範的に明示された支配的な家族イデオロギーとの関連を明らかにする。以下からはこの三つの構成要素を、(1) 福祉国家の再構成あるいは撤退と福祉改革、(2) 段階的に拡大する女性の貧困化と暴力との関係、(3) 福祉政策に組み込まれた「家族の価値」というイデオロギー、についてのケーススタディー分析を用いて描いていく。これら三つの分析カテゴリーの相関が示されるなら、読者は以下の節の中に残余的な重なりを認めるだろう。

(1) 政治体制

グローバリゼーションという同じ時代に発展したポスト・フォーディストの国家／経済のロジックであるが、その発展の足並みはそろっていなかった。現代の状況は、歴史上の偶然であるとしばしば議論される結果を含んでいる (Gibson-Graham, 1996)。別な描き方をするには、経済の発展とその具体化について発展的な概念が必要である。アメリカでは過去一世紀にわたって CEO や立法者などが政治的決定を行ってきたが、彼らはしばしば大学やシンクタンクの政治経済学の専門家に助力を求め、その結果として、今日われわれが知るような福祉国家が形成されている (Gordon, 1994)。立法者や他の政策決定者は、

競争相手や有権者、社会運動組織といった諸要素を組合せ、それをもとに政策をうまく作っている。政策決定者の政治経済学への姿勢といった、もっと目に見えにくい要素も政策を形成している。政策決定者による国家と福祉の間の適切な関係は、その決定によって影響を受ける人たちがどう生活しているのかについての根強い文化的神話、また彼らがどのように自立すべきかについての道徳的な想定を組み込んでおり、その結果、貧困化の構造的な原因を議論することが不可能になっている。福祉改革について議会が議論するときのように(Segal and Kilty 2003; Naples, 1997)、福祉政策の進展の中ではとくにこれが目に見えるかたちをとる（Gordon, 1994)。それが神話であれ現実であれ、福祉政策に組み込まれた国家による政治経済学的ビジョンから逸れて生活している人々は、懲罰的な対応を受けるか、なんら対応を受けないかといったリスクを負うことになる。

以下、二つの立法を並列するが、このことによって政策とその代表者による政治決定とがどのようにドメスティック・バイオレンスの政治経済学にとって重大な要素を構成しているかがはっきりする。リベラルによる一つの成果だとみなされている1994年の女性に対する暴力防止法（Violence Against Women Act: VAWA）は、連邦政府および州政府のDVへの対応の仕方を変化させている。1994年の多目的暴力犯罪及び取り締まり施行法（Omnibus Violent Crime and Control Law Enforcement Act）に含まれているVAWAは、州やIndian Countryにかかわりなく連邦レベルでDVを犯罪であるとした。VAWAは州が刑事裁判的介入を整備するための財源を十年近く支出している。VAWAはまた、最良の実践を特定し、アメリカ中にそれを複製するための評価プログラム研究にもお金をつぎ込んでいる。多くの人がこれらの変化を歓迎しているが、一方でVAWAは女性への暴力を扱うのに、社会問題に対する政府の「犯罪に厳しい（tough on crime)」アプローチに寄与しているのだ、という批判も存在する。にもかかわらず、VAWAは政策立案者が福祉国家の有様を変更するのと同時に、政府がバタードウーマンの福祉の擁護にコミットメントしていることを象徴するものになっている。

二年後の1996年、議会は「われわれが知っている通りの」(Kilty and Segal, 2001）福祉改革である個人責任・就業機会調整法（Personal Responsibility and Work Opportunity Act: PRWOA）を通過させた。AFDCがTANFとなった。アメリカですでに人々を階層化させていた公的支援のシステムは、貧困化した市民への給付に期限を設け、階層化をさらにすすめるものになった。複雑で難しいシステムは、移民にとってはそこからの切捨てを意味した。TANFのもとで資金（および責任）は連邦政府から州へと移り、給付は生涯で最大60ヶ月に限られるようになった。TANFは教育や職業訓練、雇用など、労働に関連した活動に参加することを受給者に求めた。さらにTANFは州が独自の福祉プログラムを作る裁量を認めている。そのうちの一つは、PRWOAの供給にFamily Violence Option（FVO）を加えるものである。こうしてせきたてられるかたちではあるが、政策立案者は貧困と暴力にある種のつながりがあることを認めたのである。

しかしバタードウーマンは、TANFにおいてAFDCの時と同様の問題に突き当たる。たとえばEden and Lein（1997）は、貧困な女性がどうやって「収支を合わせる」かについて述べている。女性たちは仕事とその他の生き残り戦略を組み合わせており、そこには性的なパートナーや子どもの父親などからの金銭的・物的援助が含まれる。Eden and Lein（1997: 158）は、彼らの研究での母親たちの多くが、「時に危険と貧困のどちらかを選ばなくてはならない」と指摘する。Jyl Josephson（2002: 15）のような研究者は、「個別的に取り扱われる男性パートナーの暴力によるコントロールが、社会福祉プログラムに内在する社会的統制と相互作用するという複合的な手段になっている」と批判している。さらに彼女は、そのような賃労働を通じた経済的自立に焦点を当てた福祉政策は、子どもや高齢者へのケアのような女性

の無償労働に目を向けておらず、最低賃金での収入では自分と家族の最低限の生存を維持することがほとんど不可能だということも無視しているとも批判している。また、経済に埋め込まれた人種主義の影響を国家が無視していることを指摘し、「有色女性は白人女性よりも労働市場で大きな不平等を受けている。しかし（新しく改革された）社会福祉システムの欠点と懲罰的な性格は、労働市場の構造に内在する不公平を全く補償しない」と指摘する者もいる。さらに、TANF プログラムがどのくらい「クライエントが自分の状況を内面化することを勧め」、「失業と不完全雇用が……個人的な失敗である」ことを認めるものであるかが立証されている（Coffield, 2001: 10）。したがって、研究者は、実践面で経済的困難の多面性に気がついており（Beverly, 2001）、ドメスティック・バイオレンス政策は最も軽んじられているバタードウーマン、すなわち貧困な有色女性が必要とする物質的資源を優先して決定されるべきだと主張している。

（2）経済編成

貧困化と DV につながりがあるという見識は、福祉改革と FVO の効果に焦点を当てた「福祉を受けている」女性の生活から第一に引き出されてきた（Brandwein, 1999; Horseman, 2000; NOWLDEF, 2002; Raphael, 2000; Tolman and Raphael, 2000）。貧困な有色女性の数が偏って多いという観点から、貧困や DV と人権主義の収斂に取り組む研究もある（Brush, 2001; Ritchie, 1996; Websdale, 2001）。

DV はさまざまなかたちで貧困化と相互作用している。第一に、暴力は女性の貧困の水準を維持したり悪化させたりする。たとえばバタラーが女性を賃労働につかせなかったり、仕事を続けることや福祉を受けることを妨げたりするときにこれがおこる。またバタラーは女性を罰したり、孤立させたり、周囲との関係を終わらせたりするために女性が教育を受けることや出世することを阻むこともある。フィードバック・ループのなかでの経済的自立や安定性、移動性の欠如により、貧困は女性の選択肢を制限し、その結果、バタードウーマンの罠を増大させるかもしれない。第二に、たとえば実際に別居や法律上の離婚をしようとするとき、暴力は女性を貧困にする。バタラーに離別を迫れば、結果として彼の収入や彼及び彼に関係のある人々からの世帯への物質的な寄与を失うことになる。女性が関係性を失えば、その結果彼女は家を失ったりシェルター生活を余儀なくされたりする。また、子どものケアや移動の手段を失うことにもなる。これらすべては彼女が職を失い、サポートの手段を失うことにつながる。第三に、暴力は女性の感情的および精神的健康に影響し、稼得能力を減少させる。

貧困と DV の間のこれらのつながりの一つあるいはそれ以上が、バタードウーマンが福祉のような社会サービスに出入りすることに関係している。DV は階級に関係なく見られるものであるが、現在の研究によると、貧困な女性のほうにより高い割合で存在し、DV に関係のある事件も多くおこっている。アメリカのあるいはグローバルな経済編成によって維持されている貧困が、バタードウーマンを罠に陥れる。暴力によって女性は、経済編成の中での経済的実行可能性、移動性、安定性を失う。したがって、不安定で低賃金、時に手当てもない仕事は、女性たちが受ける暴力を直接引き起こしているのである。国家によって誘発された貧困化と経済的な不安定性は、男性をバタラーにする状況をももたらしている。

（3）支配的な家族イデオロギー

TANF のような社会政策の変化は、そのような変化の結果に影響を受けにくい人々によってもたらされた。たとえば、学術研究者や他のシンクタンクの研究者は、「家族の価値」に関する科学的な証拠を示すことで、文化的（そして政治的、経済的）論争に寄与し続けている（Stacey, 1996）。先にも述べたように、貧困問題の解決を目的とした国家の福祉プログラムは、女性の貧困化と DV を悪化させ、また、これらの原因にもなっている。

さらに、福祉のような国家政策を通して広く表現されている支配的な家族イデオロギーの押し付けは、バタードウーマンを罠に陥れることに一役買っている。

福祉受給者が形成している家族／世帯の大多数は、福祉改革者が思い描いているような形態をしていない（Fineman, 1991, 1995）。アメリカの福祉改革は、貧困な白人女性と有色女性が世帯主の世帯が偏って多いことに対する、公然とした、一連の結び付けられた関心を反映している（Abramovitz, 1996; De La Rosa, 2000; Kilty and Vidal de Haynes, 2000; Mink, 1995; Quadagno, 1994）。福祉改革を正当化するにあたって、政策決定者や学識者は白人至上主義／人種主義で女嫌いな想像を展開している。それはたとえば、怠け者で子どもを産みすぎの福祉クイーン、あるいは寛大な福祉給付を受けようとメキシコ国境を越えてやってくる妊娠した「不法外国人」といったものである。言い換えれば、「福祉政策は、母親だけの家族に対して、彼女たちが自身の問題の原因であると非難しけなすことで、ふたり親世帯を再生産しようと機能しているのである」（Curtis, 2001: 63）。

貧困な生活をしている女性世帯の急増に対応するために、国家は男性を見つけて彼と結婚し、その結婚を維持することを貧困な女性に対してイデオロギー的にも実質的にも勧めている。たとえば貧困の解決のために受給者の子どもの父親の義務を確立することや、生物的な父親から養育費を回収すること、結婚を促進することにTANFの資金が使われている。資本主義的家族賃金という新保守主義的な家族の価値の見通しにもとづいて、政策は女性を公的支援―すなわち、生存最低生活のために政府に依存（少なくとも、政策決定者の観点からは。Edin And Lein（1997）を参照）すること―から引き離し、依存的で永続的な私的援助、すなわち結婚に結び付けようとしている。福祉政策に見られるこのような「家族の価値」の押し付けは、少なくとも三つの経済的事実に矛盾している。それは、もはや現代の経済編成においては家族賃金モデルが持ちこたえられないこと、家族や地域における女性の無賃金のケアや再生産労働はいまだ必要であること、かつての福祉受給者にかわる未来の最低限の生活を前もって示しているのは白人男性や有色男性の貧困化であること、という事実である。福祉政策は理想化された、しかし非現実的な（しかも人によっては願い下げの）家族生活の形態を支える結婚を奨励している。さらに、貧困化を軽減するため女性に結婚を勧め、福祉給付を生涯で最大60ヶ月とすることで、彼女たちを危険な状況にしている。最も基本的なレベルで、結婚に依存した経済的な生き残りはEden and Lein（1997: 153）の言う「危険か貧困か」の二者択一へと、たやすくその姿を変える。

DVと福祉政策に対する女性への理解と反応は、そのような家族イデオロギーによって形成されている。たとえばLois Weisと彼女の研究チームが見出したのは、「落ち着いた生活をしている」白人労働者階級のバタードウーマンは、家族のプライバシーを明かすことよりも、秘密性を維持し、日常生活で暴力に対処しようとし、家庭生活の安定を示すことで確保されるまともな労働者階級という純潔性を失うリスクを冒そうとしないということである。そして、この同じ女性たちが、貧しいアフリカン・アメリカンの母子世帯を公然と非難していた。対照的に、「つらい生活をしている」白人労働者階級の女性は、暴力についてもっとためらいなくはっきりと述べ、暴力から逃れるために家を出る。しかし家を出ることは彼女たちの貧困化を促進するだけではなく、彼女たちはやむを得ず「たとえ福祉を受けていたとしても、収支を合わせるために、再び暴力をふるう男性を……家に入れる」。そして、「つらい生活をしている」女性たちもまた、文化的に好ましく政策に支えられた無傷の安定した家族生活の持つ地位や楽しみを失った（Weis et al. 1998: 22、およびSatcey 1991も参照のこと）。家族の価値の要請を拒否した女性たちの生活の中の暴力は、依然としてほとんど減らないのである。

要するに、PRWOAは家族、母であること、

仕事についての特定の規範に埋め込まれた資本主義的な管理という、以前のリベラルな福祉国家を完全にネオ・リベラルな資本主義に変換する戦略をあらわしている。福祉国家の縮小がすすむ一方で、バターリング国家は日常的にDVに耐えている貧困な女性の生活を規制し続けている。そのような家族の価値にもとづいてデザインされた国家が考案した福祉プログラムと貧困の解決策は、DVと政策、経済、家族イデオロギーとの関連を示すものである。ドメスティック・バイオレンスの政治経済学はこのことをはっきりさせるのである。

4 ドメスティック・バイオレンス研究の政治経済学が意味するもの

ドメスティック・バイオレンスの政治経済学には、他の人がそのような研究を行うのをうながすような一連の動機付けと含意がある。以下では、このようなアプローチを追及するための理論的根拠を示す。

ドメスティック・バイオレンスの政治経済学的アプローチの目的は、基本的にわれわれがそれと知るような形にDVを作り上げてきた、文化的な作用と偶発的な歴史をあばくことにある。特に、政治経済学の見方にシフトすることやそれを組み込むことは、ジェンダー／セクシュアリティ、人種、階級が重なり合う批判的研究からあらわれてくるいくつかの論点や、DVと国家の暴力とのつながりに関係している反暴力運動からの問題提起を支える助けとなるだろう。したがってDVでの政治経済学的観点は、たとえば白人至上主義や人種と人種主義が政治組織や政策、経済編成、家族の価値という観念にどのように組み込まれているかを実証することによって、ジェンダーを偏心化するだろう。同時にこのアプローチは、貧困化や財の蓄積、DVに関わる社会階級の意味を生じさせる、しばしば目に見えないプロセスをあばく新しい研究を生み出すだろう。したがってジェンダーは、ドメスティック・バイオレンスについての政治経済学アプローチにおいては、アイデンティティや位置、権力といった他の指標とならぶ問題となるだろう。最後に、政治経済学の観点は、もはや類似性を当てにできないDVの歴史的・文化的比較研究を、革新的で複雑なものとする可能性がある。ドメスティック・バイオレンスの政治経済学は、それが実施された時代がナショナリズム、コロニアリズム、グローバリズムに関わらず、あるいはその地域が田舎であろうが都市であろうが、さらにはコミュニティが非宗教的であれ宗教的であれ、DV研究にこれまで欠けていた知的で方法論的なグローバリズムの枠組みを要求するだろう(2)。

「女性に対する暴力」すなわちフェミニストの観点や、批判的な観点からDVについて記述している研究者の多くが、構造的な不平等がDVを形づくり、DVが不平等を形づくっているということを理解した研究を始めている。私は他の研究者にもそのようにすることを勧めたいし、現在のDV研究の中でほとんど注目されていない領域でもそのようにすることを勧めたい。私がここで示唆しておきたいのは、研究プロジェクトで当初明らかにしようとする歴史的・文化的変容、断絶や対立といったものは、はじめはDVに関係して現れないだろうということである。しかし私は、変化や論争といったこのような時期が、DVに関する条件を創り出そうとする社会の活動を公にしていくのだといいたい。

本稿で私が主張したいのは、政治体制や経済編成—国家と経済関係のロジック—、そして新保守主義に埋め込まれた家族の価値が、DVを理解するための中心になるということである。たとえば、アメリカにおける福祉改革と福祉プログラムについての政策決定は、個人主義の、貧困化や暴力とは無縁の圧倒的なマジョリティの管理下にあるのである。これは、少なくともこのような政策を決定する者の専門家としての欠陥であろう。それは、最近の公的扶助システムの再編の中で、国家が市民の経済的生存可能性と安全とを縮小していることによって例証されている。しかし、この場合に必要とされるそのような生活状況の確認や

体系化を行うだけではなく、むしろ個人やその家族を再評価することが、DV を縮小させる方向に政治体制や経済編成や支配的な家族イデオロギーを変化させるだろう。

5 まとめ

アメリカで貧困化と DV に関する学問的な関心が再び高まりつつあるのは、研究者と擁護者との連携にその大部分を帰することができる。The Center for Impact Research は、The Project for Research on Welfare や Trapped by Poverty/Trapped by Abuse 協議会の Work and Domestic Violence の年次報告などで、貧困なバタードウーマンの生活についての調査を行っている。フォード基金は、National Resource Center on Domestic Violence の「Building Comprehensive Solutions to Domestic Violence」という、貧困と DV の重なりに焦点を当てたプロジェクトに資金提供を行っている。このプロジェクトは研究者とバタードウーマン運動のメンバーによって進められている。Claire Renzetti が発行している学際的で国際的な雑誌である Violence Against Women は、暴力と貧困化に関する地域のイニシアティブについての最先端の研究を共有するためのフォーラムを行っている。英国では DV の専門家である Elizabeth Stanko が Economic and Social Research Council をスポンサーとして多年度の Violence Research Programme を指揮している。研究者と活動家とが連携し、暴力を貧困化と併置させることで、DV に関わる公式の連合体の中では貧困をめぐる新しいイニシアティブが、そして、TANF 受給者のための組織の中では DV に関する新しいトレーニングが出てくるようになった。これらの相互関係は、経済的正義のために組織した人々と DV に対応して組織した人々との強固な連携を最終的に確立するだろう。

私がここで予備的にスケッチしてきた政治経済学的アプローチは、DV についての議論を変えていったり、議論の中の多くの対立に取り組んだりすることで、知的で啓発的な介入を行うだろう。

- 個別化された逸脱から、構造的な不平等へ
- ジェンダー間の争いを自然の姿と見ることから、ジェンダーに特有の暴力の常態化に関する歴史的・文化的・構造的理解へ
- 気質と結び付けられた嫉妬や、貧困の文化といった静止的な見方から、文化の対立的性格という流動的な理解へ
- 普遍化している理論から、地域的に文脈化された調査へ
- 犯罪を起こした人々への注目から、DV 研究にはあまり登場しない人々に対する取り込みへ
- パワーとコントロールの車輪（The Power and Control Wheel）[3] としての理解から、これまで検討されてこなかった方法としての DV 塹壕の構築に関する理解へ
- 遍在している安全計画から、記録されていない抵抗戦略へ

構造的な要因の連鎖を検討するものと定義される政治経済学的アプローチは、やがて変化し、領域を超えた違いは DV の学際的領域に幅広い貢献をするだろう。そうすることによってこのアプローチは、DV に関する現在のところ隠されているデータソースと語られていない物語を提供するだろう。

Notes

(1)「バターリング国家」という刺激的な言い回しは、人類学者である Rebecca Torstic（サウスベンド、インディアナ大学）が、1998 年に開催された William and Mary College（バージニア州ウィリアムズバーグ）主催の国際人類民族科学連合の年次総会での座談会で使用したものである。この用語の使用を快く承諾してくださった彼女に感謝したい。

(2) ドメスティック・バイオレンスの政治経済学に関心がある人のために、まずは国家と家族と血縁の関連を考えてきた学際的な研究を振り返りたい。すなわち、その土地固有の家族生活の植民地化と白人至上主義、経済と女性の地位、離

婚法改正とDVの研究である。たとえば以下を参考にされたい。Abraham (2000)、Barrett and McIntosh (1982)、Counts他 (1999)、Crisp (1999)、Denich (1974)、McGillivary and Comaskey (1999)、Hirsch (1998)、Lazarus-Black (1997, 2001)、Merry (2000)、Pleck (1987)、Websdale (1998, 2001)。家族生活についての文化政治経済学的民族史学の分野では、以下の選集などを参考にされたい。Lancaster and di Leonardo (1997)、Lamphere他 (1997)、Finn (1998)、Martinez-Alier ([Stolke, 1978] 1989)、Nash (1979)、Scheper-Hughes (1992)、Stacey (1991)。

(3) (訳者注)「パワーとコントロールの車輪」は、ミネソタ州ドゥールズ市のDV介入プロジェクトが作成したモデルで、暴力の構造を理解するために利用されている。DVが、身体的暴力だけではなく、いくつかの暴力が組み合わされたかたちで女性の生活を支配していることを表したモデルである。パワーは男性が持つ社会的な影響力、経済力、体力などの「力」、コントロールは男性による女性「支配」をさす。外輪にあたる部分には外から見えやすい身体的暴力が位置づけられ、その内側(目に見えにくい、気づかれにくい部分)に心理的暴力や経済的暴力などの非身体的暴力が位置づけられている。(松島京「ドメスティック・バイオレンス (Domestic Violence) という用語がもつ意味－先行研究からの考察－」『立命館産業社会論集』第36巻第1号、2000年)。

Reference

Abraham, Margaret. (2000). *Speaking the unspeakable: marital Violence among South Asian immigrants in the United States*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.

Abromovitz, Mimi. (1996). *Regulating the lives of women: Social welfare policy from colonial times to the present*. Boston: South End Press.

Adelman, Madelaine. (Forthcoming). Domestic violence and difference *American Ethnologist*.

Barrett, Michele and Mary McIntosh. (1982). *The anti-social family*. London: NLB

Beverly, Sondra. (2001). Measures of material hardship: Rationale and recommendations. *Journal of Poverty* 5(1): 23-41.

Blim, Michael. (2000). Capitalisms in late modernity *Annual Review of Anthropology* 29: 25-38. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.

Brush, Lisa. (2001). Poverty, battering, race, and welfare reform: Black-White differences in women's welfare to work transitions *Journal of Poverty* 5(1): 67-89.

Carrier, J. and Joseph Heyman, eds. (1998). *Virtualism: A New Political Economy*. Oxford, UK: Berg Publishers.

Cavender, Gray, Lisa Bond-Maupin, and Nancy Jurik. (1999). The construction of gender in reality crime television *Gender & Society* 13(5): 643-63.

Coffield, C. Ditmar. (2001). "Manpower Placement" and "Comprehensive Training" : The IMPACT of Indiana's "Work First" model *Journal of Poverty* 5(2): 5-20.

Coker, Donna. (2000). Shifting power for battered women: Law, materials resources an poor women of color. University of California, Davis Law Review 33: 1009-1055.

Counts, Dorothy, Judith Brown, and Jacquelyn Campbell, eds. (1999). *To Have and To Hit: Cultural Perspectives on Wife Beating*. Urbana; University pf Illinos Press.

Creed, Gerald. (2000). "Family Values" and Domestic Economies *Annual Review of Anthropology* 29: 329-55.

Crip, Jeff. (1999). A state of insecurity: the political economy of violence in refugee-populated areas of Kenya. *New Issues in Refugee Research*: Working Paper No. 16. Available online 〈http://www.unhcr.ch/refworld/pubs/pubon.htm〉

Curtis, Karen. (2001). Welfare dependency in

Delaware: A study of the state's program reform and advocacy for change *Journal of Poverty* 5(2): 45-66.

Davies, Jill. (2002). Policy blueprint on domestic violence and poverty. Harrisburg, PA: National Resource Center on Domestic Violence. Available online 〈http://www.VAWnet.org〉

De La Rosa, Mario. (2000). An analysis of Latino poverty and a plan of action *Journal of Poverty* 4(1/2): 27-62.

Denich, Bette. (1974). Sex and Power in the Balkans. In M. Rosaldo and L. Lamphere. (Eds.). *Woman, Culture & Society*. Stanford: Stanford University Press. 243-262.

Dobash, R. Emerson and Russell Dobash. (1979). *Violence Against Wives*. New York: Free Press.

-----(1992). *Women, Violence and Social Change*. New York: Routledge.

Gordon, Linda. (1994). Pitied but not entitled: Single mothers and the history of welfare. Cambridge: Harvard University Press.

Edin. Kathryn and Laura Lein. (1997). Making Ends Meet: How single mothers survive welfare and low-wage work. New York: Russell Sage Foundation.

Fineman, Martha. (1991). Images of mothers in poverty discourses. In M. Fineman (Ed.). *Mothers in Low: Feminist theory and legal regulation of motherhood*. New York: Columbia, 205-223.

-----(1995). *The neutered mother, the sexual family and other twentieth century tragedies*. New York; Routedge.

Finn, Janet.(1998).*Tracing the veins:Of copper, culture and community from Butte to Chuquicamata*. Berkeley: University of California Press.

Folbre, Nancy. (1994). *Who pays for the kids? Gender and the structure of constraint*. New York University Press.

Gibson-Graham, J. K. (1996). *The end of capitalism (as we knew it): A feminist critique of political economy*. Oxford: Blackwell.

Goode, Judith and Jeff Maskovsky, eds. (2001). *The new poverty studies: The ethnography of power, politics and impoverished people in the United States*. New York University Press.

Gordon, Linda. (1994). *Pitied but not entitled: Single mothers and the history of welfare*. Cambridge: Harvard University Press.

Gunewardena, Nandini. (2002). Attention to women's poverty in international development strategies. In S. Morgen (Ed.), *Voices: The impoverishment of women*. Washington D. C.: Association for Feminist Anthropology, 14-22.

Harrison, Faye. (1995). The persistent power of "race" in the cultural and political economy of racism *Annual Review of Anthropology* 24: 47-74.

Harvey, David. (1989). *The condition of postmodernity*. Cambridge, MA: Blackwell.

Hirsch, Susan. (1998). *Pronouncing & Persevering: Gender and the Discourses of Disputing in an African Islamic Court*. Chicago: University of Chicago Press.

Horseman, Jenny. (2001). *Too Scared to Learn*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Johnson, Holly. (1998). Rethinking Survey Research on Violence Against Women. In R. Emerson Dobash and Russell P. Dobash, (Eds). *Rethinking Violence Against Women*. Thousand Oaks, Cal.: Sage, 23-51.

Josephson, Jyl. (2002). The intersectionality of domestic violence and welfare in the lives of poor women. *Journal of Poverty* 6(1): 1-20.

Jurik, Nancy. (2003). Presidential Adress, Society for the Study of Social Problems. (Augast X), Atlanta, Georgia.

Kilty, Keith and Maria Vidal de Haymes. (2000). Racism, natibism, and exclution: Public policy, immigration and the Latino experience in the United States *Journal of Poverty* 4(1/2): 1-25.

Kilty, Keith and Elizabeth Segal. (2001).

Introduction: Examining the Impact of 'Ending Welfare as We Know It' *Journal of Poverty* 5(2): 1-4.

Kingsolver, Ann. (2002). Poverty on purpose: Life with the free marketers. In S. Morgen (Ed.), *Voices: The impoverishment of women*. Washington D. C.: Association for Feminist Anthropology, 23-26.

Lamphere, Louise, Helena Ragone and Patricia Zavella, eds. (1997). *Situated lives: Gender and culture in everyday life*. New York: Routlege.

Lancaster, Roger. (1992). *Life is hard: Machismo, danger, and the intimacy of power in Nicaragua*. Berkeley: University of California Press.

Lancaster, Roger and Micaela di Leonardo, eds. (1997). *The gender sexuality reader*. New York: Routledge.

Lazarus-Black, Mindie. (2001). Law and the Pragmatics of Inclusion: Governing Domestic Violence in Trinidad and Tobago *American Ethnologist* 28(2): 388-416.

-----(1997). The Rites of Domination: Practice, Process, and Structure in Lower Courts *American Ethnologist* 24(3): 628-651.

Martinez-Alier, Verena. [Stolke, 1974] 1989. *Marriage, class, and colour in nineteenth century Cuba: A study of racial attitudes and sexual values in a slave society*. Ann Arbor: University of Michigan Press.

McCluskey, Laura. (2001). *"Here, our culture is hard" :Stories of domestic violence from a Mayan community in Belize*. Austin; University of Texas Press.

Mcgillivray, Anne and Brenda Comaskey. (1999). *Black eyes all of the time: Intimate violence, Aboriginal Women, and the Justice System*. Toronto: University of Toronto Press.

Merry, Sally Engle. (2000). *Colonizing Hawaii; The cultural power of law*. Princeton: Princeton University Press.

Mink, Gwendolyn (1995). *Wages of motherhood: Inequality in the Welfare State 1917-1942*. Cornell University Press.

Morgen, Sandra. (2002). An overview of the impoverishment of women. In S Morgen (Ed.), *Voices: The impoverishment of women*. Washington D. C.: Association for Feminist Anthropology, 4-8.

-----(Ed.). (2002). *Voices: The impoverishment of women*. Washington D. C.: Association for Feminist Anthropology.

Munger, Frank, ed. (2002). *Laboring below the line: The new ethnography of poverty, low-wage work and survival in the global economy*. New York: Russell: Sage.

Naples, Nancy. (1997). The "new consensus" on the gendered "social contract" : Te 1987-1988 U. S. Congressional hearings on welfare reform *Sings* 22: 907-945.

Nash, June. (1979). *We eat the mines and the mines eat us: Dependency and exploitation in Bolivian in tin mines*. New York: Columbia University Press.

National Organization of Women Legal Defense and Education Fund (NOWLDEF). (2002). Surviving violence and poverty: A focus on the link between domestic violence and sexual violence, women's poverty and welfare. Washington, D. C.: Author.

Okongwu, Anne Francis and Joan Mencher. (2000). The anthropology of public policy: shifting terrains *Annual Review of Anthropology* 29: 107-24.

Pierson, Christopher. (1998). *Beyond the welfare state:The new political economy of welfare, second edition*. University Park: Penn State University Press.

Pleak, Elizabeth. *Domestic Tyranny*. (1987). New York: Oxford University Press.

Quandagno, Jill. (1994). *The color of welfare: How racism undermined the War on Poverty*. New York: Oxford University Press.

Raphael Jody. (2000). *Saving Bernice: Battered women, welfare, and poverty*. Boston: Northeastern University Press.

Ritchie, Beth. (1996). *Compelled to crime: The gender entrapment of Black battered women*. New York: Routledge.

Roseberry, William. (1988). Political economy. *Annual Review of Anthropology* 17: 161-85.

-----(1990). *Anthropologies and histories*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.

Schechter, Susan. (1999). New challenges for the battered women's movement; Building collaborations and improving public policy for poor women. Harrisburg, PA: National Resource Center on Domestic Violence. Available online 〈http://www.VAWnet.org〉

Scheper-Hughes, Nancy. (1992). Death without weeping: The violence of everyday life. Berkeley: University of California Press.

Sassen, Saskia. (1998). Globalization and its discontents: Essays on the mobility of people and money. New York: The New Press.

Segal, Elizabeth and Keith Kilty. (2003). Journal of Poverty.

Stacey, Judith. (1991). Brave new families: Stories of domestic upheaval in late twentieth century America. New York: Basic Books.

-----(1996). *In the name of the family: Rethinking family values in the postmodern age*. Boston: Beacon Press.

Stanko, Elizabeth. (1985). *Intimate intrusions: Women's experiences of male violence*. London: Routledge & Kegan Paul.

Tolman, Richard and Raphael, Jody. (2000). A review of research on welfare and domestic violence. *Journal of Social Issues* 56(4): 655-681.

Walker, Lenore. (1979). *The Battered Woman*. New York: Harper & Row.

Websdale, Neil. (1998). *Rural woman battering and the justice system: An ethnography*. Thousand Oaks, CA: Sage.

-----(2001). *Policing the poor: From slave plantation to public housing*. Boston: Northeastern University Press.

Weis, Lois, Michelle Fine, Amira Proweller, Corrine Bertram and Julia Marusza. (1998). "I've Slept in Clothes Long Enough": Excavating the Sounds of Domestic Violence Among Women in the White Working Class *The Urban Review* 30(1): 1-27.

（アリゾナ州立大学 School of Social Justice 助教授 Madelaine Adelman）

（訳：北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程・鳥山まどか）

Adelman 報告へのコメント

松本　伊智朗

1　DV の問題に社会経済的な位置付けを与えたこと自体、重要な意味を持つこと。

①DV の問題を被害者―加害者の 2 者関係に閉じ込めないこと。

②政治、経済の状態、家族イデオロギーという 3 つの視点

2　DV と貧困の関係

①貧困自体が見えにくい中では、この関係はなおのこと見えにくい

②貧困を DV の原因と見る視点と批判、困難点

- 加害者はすべての階層から出ている
- 貧困者をスティグマタイズ、ステレオタイプ化する
- 実証的研究の難しさ

③DV 被害の結果としての貧困という視点の有効性

- 現実の事例の中で問題になっている

3　政策と DV、貧困の関係―以下の①②とも日米で同じ状況にあることは興味深い

①DV 被害者への共感的な政策の一方での、社会福祉カット―生活保護の「締め付け」の同時進行

米国）1994 VAWA⇔1996 PRWOA→TANF

日本）2001 DV 防止法⇔社会保障審議会専門部会における生活保護制度に関わる母子世帯給付削減の議論

②生活保護制度のあり方がリスクを増大させていること

「DV 加害者と同居する危険」と「加害者と別れることでおちいる経済的困難」の二者択一を被害者が迫られる状況下で、生活保護への「締め付け」が前者を選択させ、結果として被害リスクを増大させること

米国）time limited system 下で前者を選択することの増大

日本）高い選別性―被害者が生活保護を受けることの困難

4 どうするか

①男性、女性のそれぞれの自立度を高めること

②問題の社会的理解を作り出すこと―見えない貧困を見えるように

③「子ども」を戦略的に位置付けることの可能性―子ども養育の社会的保障が、貧困対策であると同時に、DV 対策という側面

「別れられない理由」に、しばしば子どもの養育費の心配があげられる

「別れる理由、きっかけ」に、しばしば DV の子どものへの影響があげられる

（札幌学院大学人文学部教授）